

最終同期会（大津高1回 昭和25年卒業）

太平洋戦争の終盤誓い昭和19年に、膳所中学や大津の県・市立女学校に入学した私たちは、軍事教練や薙刀の稽古で過ごされた最後の学年だ。翌年の4月に入学した一年下の生徒は、教練の教官が徴兵されていなくなったり、運動場がイモ畑に変わったりしたから、それらの授業はなくなったし、二年生以上の男子生徒が軍需工場に動員されたから、彼らは上級生が一人もない学校で、国民学校（小学校）の延長のようなことをやっていた。

昭和20年の春になると、大阪や神戸を爆撃するB29の大編隊が、日本の戦闘機が迎撃しない夜空を通り過ぎて言ったし、やがてグラマン戦闘機が真つ昼間に滋賀航空隊に機銃掃射をするようになった。艦載機のグラマンが来るのだから、敵の艦船が紀州沖あたりに来ているのだ。私たちは本土決戦を覚悟した。

日本が降伏して本土決戦は避けられたが、戦後はじめて耳にする民主主義に私たちは戸惑った。生徒が自主的に自治会（生徒会）をつくることになったものの、民主主義に則った自治会がどんなものか見当もつかない。教師に訊いても、「人民の人民による、人民のための政治が民主主義だ」というだけで、それ以上は言わない。結局、一年から五年までの学級委員が連日、放課後に議論を戦わせ、数ヶ月かかってやっと自治会を立ち上げた。

敗戦後にそんな苦勞をした私たちも当年とって88歳、同級の男子の半数以上、女子の三分の一以上が他界しています。生存者も多くの方が歩行困難のためにこれを最後の同期会にしました。淋しい集いでしたが、お互いに「達者でね」と言い合って別れた次第です。

（高橋 勉）

（後 記）

敗戦前後の膳所中学のことを書いた拙著『やんちゃ坊主伝 戦中戦後篇』が、膳所高校の石鹿文庫に寄贈してありますので、ご一読願えれば幸甚です。